

いのちの花を咲かせよう

鈴木君代

今、学長の一郷先生からご紹介をいただきました鈴木君代といっています。私は京都生まれの京都育ちですが、京都光華女子大学の校内へ入ったのは生まれて初めてです。こんな機会をいただけなければ、みなさんの大学の校内の中に入れてもらうこともなかったのです。こんなかけがえない時と場所を与えていただいて、この出遇いに大変ドキドキしています。ありがとうございます。

私は、ものすごく目が良いのです。視力は両眼とも2・0以上あります。すごい？ 羨ましいですか？ 昔、小学校の時に、視力検査をする時に、視力表の一番下の、右とか、左とか、上とか、下とか、それが見えたら2・0なんですけど、私は、一歩下がっても、二歩下がっても、あの一歩下のが見えません。それで、健診の先生が私に、「今の日本の計測上、あなたは2・0としか書けないけれども、実際は2・2とか2・3あるんだ

よ」と言われました。「本当はあなたのような人は、アフリカとかにいます、5・8とか、6・4とかになれるんだよ」って言われたことがあるくらいです。目が良いって言うのと、この中の目の悪い人は「羨ましいな」と思われるかもしれない。でも、私は背が高く目がものすごく見えすぎるものですから、京都市内でバスに乗っていると、前の男の人たちの人の毛穴のあぶらまで見えてしまうんです。「ええー、見たくない」でしょ（笑い）。ですから、目が良すぎるっていうのもいいことばかりではありません。また、夜に車を運転して暗い道を走っていると、動物が車にひかれていることがあります。その時も、私は目が良いので、それが何の動物で、目が光っていて、ちょっと足が動いてると、「ああ、まだ生きてる」っていう悲しい場面も見えたりします。目が見えすぎるのも、良いことばかりではありません。

私は、ずっと人のことを羨ましがって生きてきました。皆さんも学んでおられる親鸞聖人の教えはシンプルです。「このままの私として生まれてきて本当に良かった」。誰と比べる必要もない。このままの私で生まれて、このままの私で生きて、このままの私で死んでいく。このことに「本当に良かった」と頷く世界です。隣りを見たら、大好きな友だちも一緒に悩んでいる、あんまり好きじゃない人も一緒に悩んでいる。お釈迦様は、「人間に

生まれたということ、全てのこと苦しみだ」と言われています。

山口県の仙崎に、金子みすゞさんという詩人がおられました。今でも、小学校の国語の教科書に詩が載っています。その人の詩に、私が曲を付けさせてもらっていますので、その曲を聴いていただいてからお話をしたいと思います。「わたしと小鳥とすずと」です。

♪わたしが両手をひろげても、お空はちつとも飛べないが、

飛べる小鳥はわたしのように、地面（じべた）をはやくは走れない

わたしがからだをゆすつても、きれいな音は出ないけど、

あの鳴る鈴はわたしのように、たくさんの歌は知らないよ

鈴と、小鳥と、それからわたし、みんなちがって、みんないい

ありがとうございます。金子みすゞさんは、今から一〇〇年以上前に二十六歳という若さで亡くなって逝かれた方です。私が初めて彼女の詩に出遇ったのは、『大漁』という詩でした。

『大漁』

朝焼小焼だ

大漁だ。

大羽鰻（おおばいわし）の

大漁だ。

浜はまつりの

ようだけど

海のなかでは

何万の

鰻（いわし）のとむらい

するだろう。

私はこの詩に出遇ったときに、これは、人間の眼（まなこ）ではなくて、仏さまの眼だと思えました。人間の眼で考えると、大漁の旗をあげて港で皆が喜んでいる場面を見た

ら、「良かったなあ」と思います。しかしながら、金子みずゞさんは、海の底では、何万の鰻が、父や、母や、兄弟姉妹や、愛する人を失って、お葬式をしているだろうと。私はそういう詩に出遇って、ビックリしました。みなさんも、今までの人生の中で、とてもビックリされるようなことがあったと思います。いろんな人に出遇ったり、いろんな言葉に出遇ったり、いろんな、かけがえのない時と場に出遇うことによって、ビックリするような体験。ビックリすることによって、自分自身が変わっていくような世界があります。この詩に出遇った時の私はまさにそれでした。この人はどんな人だろうと思って調べましたら、金子みずゞさんは、おばあさんに連れられて、よくお寺にお参りに行かれていたのです。それが親鸞聖人のお寺だったのですが、知らない間に仏さまの教えが身体に備わって、あのような仏さまの眼からの詩を作られたのです。

私は自分自身のことを人に話すことが極端に苦手です。自分のことを話せるようになるのは、その出来事から多くの時間が経過して、遠い過去のことになってから、そのことが自分の中で消化され、決して無駄なことではなかったと納得できると、自分のことを少しずつ話せるようになります。それもきっかけがないと自分からは言えません。しかし、私は人前で歌を歌ったりしていますから、多くの人にはそんな風には思われず、思いが伝わ

らなくてしばしば誤解され、心無い言葉が聞こえてくるたびに傷ついてきました。そのことさえもまわりはなかなか理解してくれませんか。

『わたしと小鳥とすずと』という詩の最後には、「鈴と、小鳥と、それからわたし、みんなちがって、みんないい」とありますが私はこの詩に、「違うからいいんだよ、違っていていいんだよ、違うあなたに遇えたことで違う私にも遇う世界をいただいたんだよ」とつけ加えさせてもらって歌っています。どんな人でもそれぞれに、生まれてきたからには仕事を与えられます。例えば、

みなさんも私も仏さまから種をプレゼントされています。その種は、あなたにしか咲かせることのできない、いのちの花を咲かせる種です。その種から咲いた花は、一人ひとり、他の人と違っています。目の良い人もいれば、目の悪い人もいます。私より背の高い人もいれば、背の低い人もいます。男の人もいれば、女の人もいます。結婚している人もいれば、結婚していない人もいます。年を重ねている人もいれば、若い人もいます。肌の色が違う人もいます。国の違う人もいます。命の背景が違ったとしても、今まで歩いてきた道が違ったとしても、私たち一人ひとり、仏さまから「生まれてきてくださって、ありがとう」という「かけがえないのちをいただいた今、ここにいるんだ」という世界です。

今、「背が高い」と言いましたけれども、私は、小学校六年生の時に、すでに一六五センチありました。このままだったら、二十歳、みなさんぐらいになる頃には二メートルぐらになるかもしれないと思って、小さな靴を履き、洗面器をかぶり、運動はしないようにして、牛乳を飲まないようにして、寝ないようにして…、何で寝ないかわかりますか？「寝る子は育つ」と聞いていたからです。とにかく、これ以上身体が伸びないように、ありとあらゆることをしました。だけど、身長は伸び続けました。周りの人からも、「背が高いですね」と言われるのはまだいいんですが、「でかい女ですね」って言われるのがすごくショックで、「何センチですか」って聞かれたら、「一六九・六五三四八センチ」って言うてきました。要するに、「私、一七〇センチはない」って言い続けてきたんです。一六九・六五三四八センチと、一七〇センチでは大違いでしょ？感じがね。働くようになってからも、身体測定の際に、体重はどうすることもできないですが、身長は何とかなるんです。小さい人であれば少し背伸びをする人がおられます。私は反対で大きいのが嫌ですから、どうするかと言うと、こう首をすくめるようにするのです。そうしたら、一六九・六五三四八センチになります。

しかし、「みんな違ってみんないい」、あなたは、あなたとして生まれ、あなたとして生

き、あなたとしてそのまま死んでいく、そのいのちをとともに生きているという教えに頷かせてもらって、何年か前からはまっすぐ立つようになりました。そうすると、最初の年は一七〇・八、次の年は一七一・二、次の年は一七二・一、一番最近に計った時は一七二・六センチでした。これは、今でも成長しているということではなくて、私の縮こまっていた心、背の高い私は私として否定される、「でかい女だ」と言われるのが嫌だという私の思いから心が解放されて、一七二・六という身長になったのだと思います。

私は幼い頃からコンプレックスだらけの人間でした。親が喧嘩する中、布団をかぶって、ぶるぶる震えながら生きてきた私は「鈴木さん」って呼ばれるだけで「すいません」って思わず言うってしまうような自己肯定感の低い人です。最近、「あなたはアダルト・チャイルドなんだよ」と言われました。アダルトチャイルドとは、子どもの時に豊かな愛情を与えられなくて、大人になっても生きにくさを感じる人のことです。そのことを教えられて、「ああ、そうだったのか」と思って少し楽になりました。私の場合は、小さい時に両親が離婚して、独身の叔母の所に養女に行ったので、幼い時から「寂しい、寂しい」という気持を抱えながら大人の顔色を見て生きてきました。そのため、自己肯定感がどうしようもなく低く、「私はこのままの私で本当に良かった」と思えない人でした。

そんな私ですが、諦めることなく呼びかけてくれる声があるという世界を親鸞聖人の仏教に教えてもらって、今は悩みながらも生きさせてもらっております。悩みは消えないです。一生涯消えることはないと思います。今までの人生で、悩みのない人はこの中に一人もいらっしやらないと思います。なぜかという、悩みを持つている者を人間というからです。そして、人間はどういう存在かという、人の間と書きますから、誰かとの繋がりの中で、今、私がここにいる。そのことに目が覚めたら、あんなに辛かったことも、あんなに苦しかったことも、今の私が私になるために、本当に必要なことだったんだなと思えます。それは、私だけが助かる、救われるんじゃない、あなたも私もともに救われていく、これを仏教では自利利他円満というのですが、あなたも私もともに救われていく世界が、すでに開かれているんだよ、そのことに目覚めなさい、ということなんです。

今日は十一月三十日です。お誕生日の歌を歌いたいのですが、この中に十一月生まれの方はいらっしやいますか。はい、あなた。何日ですか？ 十八日、おめでとうございませう。下のお名前は何て言うんですか？ あきさん？ はい、あなたは何日ですか？ 昨日？ まあ、そうですね。二十九日、下の名前は何ですか？ せりさん、みんな良い名前だなあ。私は、君代という名前が大嫌いでした。では、今日は、あきさんと、せりさんの

お名前をみなさんの代表として誕生日を祝うために歌います。みなさんも自分の誕生日のことを思いながら聞いてください。年を重ねてくると、誰も誕生日のことを覚えていてくれないと聞きます。でも、自分の誕生日だけは、この私が私として生まれてきた日として、自分でお祝いしてもらいたいと思いますし、自分の誕生日がお祝いできたら、目の前にいる大切な人の誕生日も心からお祝いできると思います。そのような思いを込めて、この歌を歌っています。

♪誕生日のことは覚えていきますか

ロウソクの匂い胸にためた

あきさん、せりさん、あなたのことをお祝いしましょう

あきさん、せりさんである今日と明日のために

生きてきたつもりが生かされて 今ここにいる

そんな私であって あきさんと、せりさんと

みなさんと、この光華の講堂にいる

おめでとう 今日まで辿りついたんだよ

辛いことのほうが よくあるけれど
ありがとう 理由は何もないんだよ
あなたという人がいることでいいんだよ

もらったものを覚えていますか

形のないものも たくさんありました

特別でないものが 特別になって

あきさん、せりさんの心 豊かにした世界もあったでしょう

生きてきたようで生かされて 今ここにいる

そんな私であって、あなたと、あなたと

この時と場を一緒にしている

おめでとう 今日まで辿りついたんだよ

辛いことのほうが 人間に生まれてきたから必ずあるけど

ありがとう あなたが生まれてきてくれたこと

あなたという人の誕生に　ありがとう

ありがとう　あなたが生まれてきてくれたから

思い難くして　いま出遇う世界をとものにいたただいたんだよ

ありがとう　理由は何もないんだよ

あなたという人がいることでもいいんだよ

生まれてきてくださって、ありがとうございます。どんな人も、どんな人も、生まれてきてくださってありがとうございますといういのちを、今、生きています。辛いことも、苦しいことも、きついことも、必ずあります。

私の先生が亡くなって十二年になります。今年で十三回忌ですが、その先生の誕生日がもうすぐなんです。十二月の二日です。亡くなってからもずっとお誕生日をお祝いしてきました。私はその先生が亡くなる時に、「出棺」ってわかりますか。先生の亡骸が棺（ひつぎ）に入って焼き場に行く時に、棺にしがみついて泣いて、泣いて出棺時間を遅れさせました。「君代さん、おやじから離れてくれ」と息子さんに言われて、ハッとして棺から離れた時に「出棺」していかれました。先生の死はそれくらい悲しくて、何も食べられな

くなつて、それからすぐ五キロぐらい痩せました。先生がおられない毎日なんか考えられないと思うほど悲しかったですが、いろんな人が、背中をさすってくれました。

しかし、考えてみたら、涙が涸れるぐらい、ものが食べられなくなつて痩せるぐらい、その人がおられなくなつたことを悲しめる人に出遇えたということが、すごいことだと思えるようになりました。その人が生まれて来てくださらなければ出遇えなかつた世界がある。ですから、先生が亡くなつてからもその先生のお誕生日をお祝いしています。みなさんも、どうですか、自分がこのままの私として生まれて、生きて良かったなといえる世界を、ともに生きていただきたいと思います。

私は、今から三年ぐらい前に、ものすごく辛い出来事がありました。みなさんも辛い出来事はあると思いますが、元々、自己肯定感の低い私が、自分の人間性をまるごと否定されるような出来事に遭つて心身共に壊れてしまいました。叩いた人間は忘れてしまうけれど、叩かれた人間は忘れられません。そのことが二十四時間頭から離れなくなつて、夜に寝られなくなりました。夜に寝られなかつたら、ご飯が食べられない。それでも朝になると仕事に行っていました。三カ月で十三キロ痩せました。今は三キロぐらい戻ってきましたが、とにかく本当に辛かったです。ものすごく辛かったです。毎日、毎日、どうして朝が

来るのかと思うくらい辛かったです。

でも、明けない夜はないのだと今は思います。その人のことを、ものすごく恨んだりしましたが、マザーテレサという人は、「愛の反対は憎しみではなくて、無関心だ」と言っています。さっき言いましたように、私たち人間は、いのちの花を咲かせるために、仏さまから一人ずつ種をプレゼントされています。それは、「本願」といって、「どんな人も出遇い続けていきたい」という根っここの願いです。人間は相手に対して無関心ではない存在です。ムカツクという形で、大嫌いという形で、大嫌いのすぐ近くに大好きがあるんです。私は、傷つけられた人のことを信頼していて、その人のことが大好きだったから、あんなにも苦しかったのだと今は思います。大嫌いという形で、憎しみという形で、実は、私たちは目の前の人と出遇っていきたくと強く望んでいるのだと思います。

新潟に金子大築という先生がおられました。その方が、「花びらは散つても花は散らない 形は滅びても人は死なない」という言葉を残してくださっています。みなさんも、今まで生きてきた中で、大切な方とお別れをしてきた人もいらっしやると思います。では、亡くなった人はどうなるのかというと、死んで終わりではないと思えるようになりました。私たちの中に生き続けるのです。人間は死んで終わりではありません。

♪ 大丈夫 どんなに辛くても

大丈夫 どんなに苦しくても

大丈夫 安心して悩んでゆける

花びらは散っても 花は散らない

大丈夫 涙流しても

大丈夫 どんなに叫んでも

大丈夫 安心して歩いてゆける

花びらは散っても 花は散らない

あなたが あなたのまんまでいいと

一人一人に与えられているから

あんなに辛いことも苦しいことも

あなたが あなたになる大切な出会い

大丈夫 どんなに怖くても

大丈夫 どんなに淋しくても

大丈夫 安心して生きてゆける

花びらは散っても 花は散らない

あなたがここにいてくれるだけでいいと

一人一人に願われているから

あれほど辛い時も苦しい時も

あなたが あなたに遇う大切な時間

あんなに辛かったことも、あんなに苦しかったことも、あなたがあなたになるための、大切な時であり、場所です。気がついてみたら、今までもあったと思います。きつかったこと、死にたいくらい辛いこともあったと思います。でも、そのことを通り過ぎてしまえば、あんなことで自分は悩んでいたのだと思える時が必ずあります。

今年、私の友人が五月に亡くなってしまいました。自ら首を吊って亡くなってしまいました。よくお寺の勉強会で会っていましたが、私が三年前にまるごと自分を否定されて、辛くて痩せた姿を見て、「どうしてそんなに痩せてるの？」って、心配してくれました。「最近、マッサージを覚えたから、血の循環が良くなるようにマッサージしてあげる」と、学習会の後、施術してもらったのが彼女と会った最後でした。親鸞聖人の『教行信証』の

総序に、「噫（ああ）、弘誓の強縁、多生にも値（もうあ）いがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ」という言葉が出てきますが、その「噫」という言葉が私の口から出てきました。私の友人が自ら死んでいるのを発見したのは、学校から帰ってきたその友人の子どもでもでした。その子どもの気持ちになると言葉になりません。本当に苦しい時もあつたと思いますが、その時に立ち止まらせてくれる何かがあれば、彼女も死ななくて、あんなにしんどかった時もあつたなって、後になつて言えただろうと思います。私たちは、本当に不思議ないのちをいただいて、今ここに生きているということ。普段は忘れていきますけど、そういう出来事に遭うとそのことを痛切に感じます。

沖繩に行ったことのある人はいますか？ 私の友人に沖繩の東本願寺のお寺の跡取り娘がいます。ご養子さんに来てもらつてお寺の跡を継ぐことを強く望んでいました。そして、結婚していない私に、「どっかで養子を探してきてくれ」つてお願いされました。「自分も結婚してないのに、なぜ私があなたの養子を探すの？」と思いましたが、「あなたは、あちこちに友達がいるから、どっかで探してきて」と強く頼まれたので、石川県にあるお寺におられる、三人兄弟の次男を紹介しました。彼は、石川県からサンダーボードに乗っ

て、彼女は、那覇空港から飛行機に乗ってきて、私は二人を、京都で会わせたんです。愛のキューピッドならぬ、愛のお坊さんです。私は二人が最初に会った瞬間に「これはダメだな」って思いました。私の友人はその男の人を見て、一目惚れしたんです。もう、ビビッときたのでしょうか。好きになってしまった。でも、男の人の方は、全くその気がないようにみえました。しかし彼女は、それから熱烈なアタックをしました。那覇空港から小松空港まで飛行機で向かい、石川県の彼のお寺に行って、掃除したり、洗濯したり一週間ぐらい滞在して、相手の男の人に「好き、好き」と言い続けました。大切なことです。

結局、二人は結婚することになり、私は、沖縄の彼女のお寺の仏前結婚式で司会をして、披露宴ではお祝いに歌を歌うことになりました。みなさんの中で披露宴に出たことのある方もいらつしゃると思いますけど、一番前の席って誰ですか？今のみなさんだったら、一郷学長をお呼びするでしょう。私が今まで出席した披露宴では、一番前の来賓席には恩師や会社の上司を招待していました。通常、親族の席は、新郎新婦を双眼鏡がないと見えないような一番後ろの席です。ところが、沖縄の披露宴の一番前の席はお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんだったのです。私はそのことにもすごくビックリしました。私は歌を歌うので、結婚式の披露宴に北海道から九州まで招待してもらってき

ましたが、このような披露宴は初めてで衝撃をうけました。ですから、私は新婦である友人に聞いたんです。「何で一番前の席が、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんなの？」と。彼女は、「当たり前さあ。命と命が出会って、命を生み出すお祝いの席に、私の命を、そして、一目惚れして、沖縄まで養子に来てくれるダーリンの命を生み出してくれた、おとうと、おかあと、おじいと、おばあに、お礼を言わんで、いつ言うのさあ」と言ったのです。本当に感動しました。私たちは大人になると、披露宴では、一番後ろの席が親族の席だと当然のように思っています。しかし、小学生に「結婚式で一番前の席は誰？」と聞いたら、「お父さんとお母さん」って言います。自分を生んでくれたお父さんとお母さんだからです。どこかで私たちは、大人になって大切なことを見失ってしまったのかもしれない。

沖縄には「ぬちどう宝」という言葉があります。命こそが宝であるという意味です。世界でも豊かとされる日本という国には、年間三万人の方が自ら命を絶っている悲しい現実があります。沖縄では、自ら命を絶った人は、親族のお墓には入れないと聞いています。命は宝だから、命を粗末にするような人間はうちの子ではないというぐらい、沖縄では命を大事にしているのです。しかし、そのことがまかり通らなかつたのが戦争の時代で

す。

一九四五年四月一日、沖縄にアメリカ軍が上陸してきた時に、住民は「ガマ」という自然の洞窟に逃げ込みました。間違った教育のために、多くの人たちがそこで自ら命を絶つたという過去があります。読谷村のチビチリガマでは八四名の方が亡くなっています。ところが少し離れた場所にあるシムクガマでは誰も亡くなっていません。一〇〇〇名の人たちが生き延びたのです。その違いは何かと言うと、チビチリガマでは、アメリカ軍がガマの近くまで攻めてきた時に、パニックになりました。みなさんと同じ年くらいの女子学生が「私は、アメリカに殺される前に、お母さんの手で殺してもらいたい」と言い出したこともあって、ガマでは、年離れた親を息子が、乳飲み子を母親が……という形でお互いを手にかけて、亡くなっていかれました。シムクガマにおいても同じようにアメリカ軍が攻めてきてパニックになりましたが、そのガマには、ハワイ帰りの兄弟がいて、「みんな待て」と。「おれたちはアメリカ人を知っている。英語もしゃべれる。俺たちがアメリカの兵隊と話をしてくれる。俺たちが戻って来なかったら好きにしたらいい」と言って、結局、そのガマの人たちは生きることができたのです。生きることのできた人たちは今の私たちとも繋がっていきます。

私は沖縄に行くたびに、このことを忘れてはならないと思います。戦争は絶対にしてはならないし、もう二度とあのようにならないように願っています。なぜならば、命は取り返しがつかないからです。あなたに死んでもらいたくない。あなたに人を殺してもらいたくない。そういう思いが深くあります。そういうことを教えて下さったのが、十二年前に亡くなった私の先生です。先生は、「戦争は人間が人間でなくなるものだから絶対にしてはならない」。「仏さまの教え、南無阿弥陀仏のいのちの呼び声を聞いて、あなたはあなたとして、本当に良かったと思えるまで、生きなさい」と、教えてくださいました。「苦しみや悩みをなくしてしまうことが宗教ではない。宗となる教えは、気がついてみたら、苦しみや、悩みが、あなたを道に立たせ、歩ませてくれる。それは、死ぬまで終わることのない歩みなんだ」と、教えて下さった先生がおられたから、眠れなくても、食べられなくても、体重が減っても、辛くても、「生きろ」という声が今でも聞こえてくるから、私は生きてこうやってみなさんと会うことができました。

私は、お寺の生まれではありません。君代という名前は君が代から取っています。家の宗教は神道でした。六歳の時に両親が離婚して、小学校三年生の時、仲の良かった友達に「あなたとは遊べへん」と言われました。「何で遊べへんの？」と聞いたたら、「あなたんと

こは、お父さんがいない家だから。お父さんがいない子とは遊ぶな、とお母さんに言われた」と。私は、かなり感受性が強いものですから、その同級生の言葉に心が壊れてしまっただんです。それから、学校でバタンと倒れるようになって、たびたび救急車で運ばれるようになりまして。私は今まで救急車に三十回以上乗っています。今で言うパニック症候群です。過呼吸のきつい発作が起きて、どうすることもできなくて、救急車を呼ばれて病院に運ばれました。それが続くと、私の生きる力がだんだん弱ってきて、死ぬことばかりを考えていました。「何のために生まれてきたのか」ということがわからなくなりました。

私を産んでくれた病気の母も育ててくれた叔母も、心配したのだと思います。「この子は、このままでは死んでしまうんじゃないか」と、奈良の大きなお寺に、夏休みの間預けられたんです。そして、預けられたお寺の本堂の隅っこで、私は死んでしまいたいと思って自殺の本を読んでいたのですが、そこのお坊さんが、その自殺の本を取り上げて、私を境内へ連れて行きました。「君代ちゃん、セミが鳴いているでしょう。ア리가歩いていくでしょう。草花が命いっぱい咲いているでしょう。これ、君代ちゃんと同じ命なんだよ」って言われたんです。またビックリしました。大人たちは、セミの命や、アリの命や、草花の命と人間の命が同じだと、教えてくれなかった。私は、お坊さんに「いのちの平等」

を教えられたことよって、お坊さんだったら、「私は何のために生まれてきたか」ということを教えてくれるかもしれないと思ったんです。

幸いなことに、京都には仏教寺院がたくさんありました。そして私が仏教寺院を訪ね歩き、仏教を学んでいく中で、最終的に出遇った人が、親鸞聖人の教えに生きる方でした。親鸞聖人の言葉は、私に、「悩み（煩惱）を捨てることもできない凡夫（ぼんぶ）だ」と教えてくださいました。凡夫は、人を嫉んだり、羨んだりして、いろんな思いが死ぬまで消えない。だからこそ、私たちは人間として生まれてきて、隣の人も、幸せそうに見えるあの人も、みんな同じように悩みを持っているから、ともに救われていきましょう、私たちはどうすることもできないが、仏さまに「南無阿弥陀仏」とお念仏を申して、あなたも私とともに救われていきましょとその教えに出遇って、「ああ、その道を生きていきたい」と、具体的にそういう先生に遇わせてもらって、今、ここに生きています。

今年の七月六日に、オウム真理教の人たちが死刑になりました。みなさん方もご存知だと思います。私はその中の一人の人と、十年間、面会を続けてきました。井上嘉浩という人です。京都出身の人で、住んでいた所は私の家の近くでした。私は仏教に出遇って、最終的に親鸞聖人の教えに導く先生に遇わせてもらって、悩んだり、凹んだりするままに、

生きさせてもらっています。歩かせてもらっています。その井上嘉浩という人は、悩みの中でたまたま出遇った人が、麻原彰晃という人でした。一生懸命に、社会のために自分はどうしたらいいのか、真面目に、本当に清らかな気持ちで道を求めたからこそ、若くしてオウム真理教の要職を任され、結果的に死刑という形で亡くなってしまいました。しかし、十三人の死刑囚のうち、一番で無期懲役だったのは井上さんだけでした。なぜかという、あの人は殺人からは逃げていたからです。けれども、麻原彰晃という人の側近中の側近と言われて、世論の影響もあって、二審で死刑に覆され、そのまま執行されてしまったのです。井上さんのお母さんにご遺体を大阪拘置所まで引き取りに行きました。そのあと、お通夜とお葬式を勤めさせてもらいました。

仏教では、人を殺すことは正しい智慧ではないと説きます。日本の死刑は絞首刑で行われます。公務員である刑務官の三人が、三つボタンを同時に押すと台から板が外れることよって人を殺します。三人でボタンを押すのは誰が押したかわからないようにする刑務官への配慮です。「死亡診断書」には、亡くなった時間と、亡くなるまでの時間が書いてありました。下から見ると、心臓が動いているのがわかると死刑に関する本で読んだことがあります。想像しただけで気が遠くなります。

井上さんは、いつ面会に行っても、本当に優しい人でした。私が、悩んだり苦しんだりしていた時いつも言葉をかけてくださいました。私の友達が亡くなった時も、私が「お葬式に行きたくない」と言ったら、「君代さん、お友達が待っているから、行ってあげなさい」というような人でした。親鸞聖人は、「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」と仰っています。私たちは、自分の心がよくて悪いことをしないのではなくて、縁が整えば、人を傷つけないと思っても傷つけてしまうし、傷つけられたくないと思っても人に傷つけられてしまう存在です。井上さん以外の亡くなった十二人にはお会いしていませんが、同じ状況だったと思います。ターニングポイントは、「どんな人に出遇ったか」ということです。私たちは、出遇いによって道が大きく変わってきます。私は、アクリル版を通して十年も面会しながら、いつも何を思っていたかというところも、出遇う人が違っていけば、アクリル板の向こう側にいたのは私かも知れないということです。何か、私に出来ることはないかと思つて会い続けてきました。井上さんは「生きて償いたい」と言われていました。それは、今の若い人たちが、カルトの宗教に行くような時代の中で、自分がやるべきこと、仕事があるのだと。もう二度とあのような悲惨な事件が起こることのないように生きて償うこと。オウム真理教の事件がなぜ起きたかという

ことは、全く解明されていません。その仕事は、あの人たちにしかできないことです。私の知っている先生は、「死んだぐらいで罪は償えない。一生かけて、自分のしてきたことを懺悔して、その責任を果たさなくてはならない」と言われています。

私の自己紹介の歌を歌いたいと思います。

♪お坊さんに憧れてお寺に入ったの

黒い衣姿に心惹かれて

お坊さんが好きだからお寺に入ったの

みんなに「なんでや？」って聞かれたけど

お坊さんに憧れてお寺に入ったの

お経に遇うのがすごく楽しみです

お坊さんに憧れてお寺に入ったの

あの日の私を助けてくれたから

想像していたのとはずいぶん違っていたし

いろんな辛いこともかなりたくさんあったけど

グラグラ音立てて崩れてしまう世界も

やっぱりかけがえのない人との出会いには勝てなかった

お坊さんに憧れてお寺に入ったの

そういうとみんな顔をしかめたけど

お坊さんが好きだからお寺に入ったの

いくら不思議な顔をされても

お坊さんに憧れてお寺に入ったの

そんな難しくなく本当に憧れて

お坊さんに憧れてお寺に入ったの

あの日の私を助けてくれたから

変なやつとよく言われたけど

憧れた世界はとてつもなく広がったし

やっぱりひっそりけれど確かに

悩みながら

弱さを抱きしめながら

一緒に歩いてゆこう。この道を

お坊さんに憧れてお寺に入ったの

黒い衣姿に心惹かれて

お坊さんが好きだからお寺に入ったの

みんなに「なんでや？」って聞かれたけど

お坊さんに憧れてお寺に入ったの

お経に遇うのがすごく楽しみで

お坊さんに憧れてお寺に入ったの

あの日の自分がひっくり返るような

素晴らしい出遇いが私を生きさせたから

ありがとうございます。私は、自分のことを捨てた父親と母親のことを恨んで生きてきました。未だに、小さい子が両親に連れられているのを見ると、涙が出るくらい羨ましいです。でも、人生のどんなことも無駄ではなかったし、私は両親が離婚したり、自分が捨てられたり、叔母の所へ養子に行つて、「お父さんのいない子とは遊べない」と言われ

ていじめられたり、ものすごく辛い思いもしましたが、そんなことがなければ、きっと仏さまの教えに遇わせてもらうことはありませんでした。

私は、大学の学費を自分でアルバイトしながら大谷大学に通いました。哲学と仏教を学びたくて大学に入ったのに、全然大学に行けなかった。何のためにアルバイトしてるのかと思いつながら、学費を稼ぐために働いていました。しかし、そのお陰で、もっと仏教を勉強したいと願って、道を求めることによって、かけがえない先生に遇わせてもらいました。

ですから、どんなことも、無駄なことは一つもありません。これまでも、そしてこれからも辛いことも迷ったり苦しんだりすることもあると思います。みなさんが、みなさんにしか咲かせることのできないそれぞれのいのちの花を咲かせてくださることを願って、最後に『回向』という歌を歌います。回向とは、差し向けるという意味です。仏さまから差し向けられている世界です。それはどんな世界かというと、出遇いの喜びです。「あなたに遇えて本当によかった」という世界です。それこそ、私の両親が離婚することがなければ、今日のこの時はなかった。ともに生きていきたいという仏さまから一人ひとりにいただいている種によって、あなたのいのちの花を咲かせてくださいという、仏さまの『回

向』です。

♪願わくば

一切世界の人々と

この出遇いの喜びを

みな平等に分かち合い

ともに仏になる心おこして

阿弥陀みほとけの

安楽国に生(あ)れ

生きてはたらく身とならん

南無阿弥陀仏 ありがとうございますございました。

——二〇一八年十一月三〇日——